

## 奈良・平城宮跡（第四三次調査）

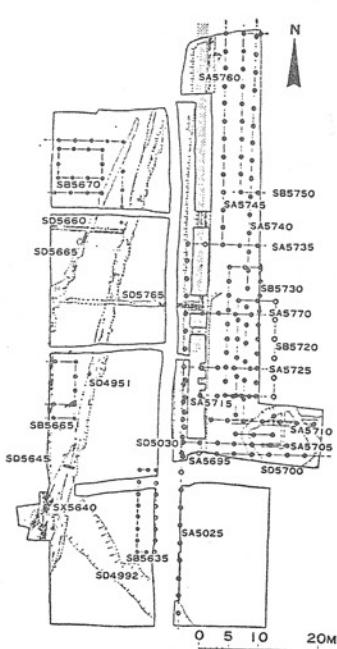
1 所在地 奈良市法華寺町  
2 調査期間 一九六七年（昭42）九月～一九六八年四月  
3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部  
4 調査担当者 杉山信三

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

発掘区は平城宮の東張出部分南門の北方にあたるところで約二〇〇m<sup>2</sup>にわたって設定し、調査を実施した。検出した主要な遺構は東西堀六条、南北堀三条、掘立柱建物五棟、及び南北溝、斜行溝、



### 8 木簡の収容・内容

- (1) 「近江国甘作郡雄諸郷」
- (2) □養老五年正月 (177)×22×8 059 1111〇〇号
- (3) 「伊豆国那可郡和志郷庭科里人アシナガ」 (183)×28×4 039 1111九七号
- (4) 「右京一条四坊戸主國覗忌十薩比登〔誠力〕」 (226)×23×4 019 1111九〇号
- (5)
  - 「欲給故牒 右如件」
  - 中上 近江国事」
  - 「斗一升□升」

(119)×9×2 019 1111九一号

玉石敷の溝等である。木簡はこのうち斜行溝SD四九五一～発掘区の東北から南西にむかって斜行して流れる一から計二六点がみつかった。この溝は上層と下層とにわかれ、下層の溝は幅約1mあり、両岸を小杭と側板とで土どめをほどこしている。上層の溝は幅一・五mに拡幅改修したもので、下流で流路をさらに西へよせていね。

木簡はすべて下層の溝から出土した。また同じ溝から「少子」「厨」「神龜」「夫」などの墨書き土器が出土している。

(6)

「▽志摩国答志郡和具郷難設里戸主大伴マ祢麻呂口」

同羊御調海藻六斤  
養老七年五月十七日

295×33×4 032 三一九六号

(7)

「□八人 小□ □」 197×38×3 011 三一九五号

(8) • ××諸々尔味有酒又味物

忽尔相有時□矣也 〔<sup>え</sup><sup>カ</sup>〕 (147)×(17)×2 081 三一九三号

(9) ×□人龍 刑マ大麻呂」 (160)×21×5 019 三一九四号

(10) ×調荒堅魚十一斤十 両 142×34×6 011 三一九九号

## 9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九六八』

(一九六八年)  
同『平城宮木簡 三』(一九八一年)

(鬼頭清明)

奈良国立文化財研究所

『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』

(A四版・本文一六頁・図版四〇枚・一九八六年三月刊)

頒価 四、五〇〇円 四五〇円 真陽社

## 『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』の刊行

現在、奈良市庁の南西約100mの所に復原・整備される特別史跡・宮跡庭園の発掘調査報告書が刊行された。調査は昭和五〇～五九年までの間に行われ、総面積六六〇〇m<sup>2</sup>に及ぶ。京内の一坪の様相が明らかになるとともに坪の中央に屈曲した石組の園池が発見され、奈良時代の庭園の実例として貴重な遺跡である。発掘調査では一〇一点の木簡が出土しており、和銅年間の貢進物の荷札や、「北宮」「竹野王子」「御坏物」「中務省」など注目すべき語句を記す木簡が多い。特に「北宮」は長屋王室の吉備内親王邸と考えられ、古代史研究においても興味深い内容をものいえる。奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』『平城宮発掘調査出土木簡概報』(1)・(2)などに略報告されているが、本報告ではそれらをまとめ、一点ごとに解説を付けており有益である。